

2-1.家康公生誕の地にみる歴史的風致

(1)はじめに

徳川家康公の生誕地である本市には、徳川家の先祖である松平氏や家康公が創建に関わる寺社が数多く存在する。松平氏、そして家康公の勢力拡大とともに市内の各地に建立されたそれらの寺社は、家康公が「征夷大^{せいゐたいしやうぐん}将軍」として天下泰平の世を築くと朱印状^{しゆいんじやう}が与えられ、一層格が高められることとなった。家康公が亡くなると「東照大権現」として神格化されたことで、生誕地である岡崎の地は聖地となり、顕彰の舞台となる関係寺社は華麗な装いをこらすことになった。

これら本市の一大特色である松平氏・徳川家建立の寺社には松平氏・徳川家による寄進物も多く、岡崎の歴史を語る貴重な文化財となっているほか、これらを舞台に行われる顕彰活動や年中行事は現在も脈々と市民に受け継がれている。

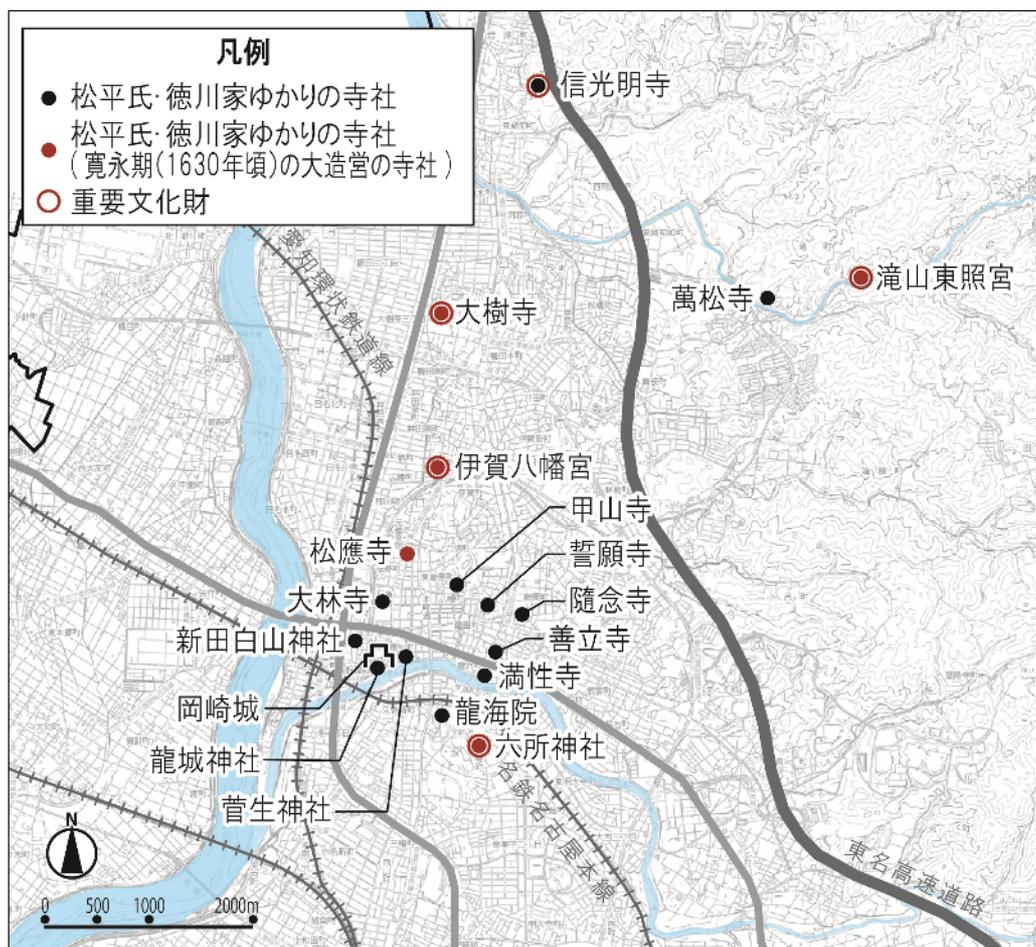


図2-1-1 松平氏・徳川家ゆかりの寺社（主に中心市街地）

(2)家康公顕彰の始まり

祖父・家康公への崇敬が特に厚かった家光が江戸幕府3代将軍になると、日光東照宮や上野寛永寺を始め多くの寺社が造られ、先祖の地である岡崎でも、松平氏・徳川家ゆかりの大樹寺、伊賀八幡宮、六所神社、松應寺で大規模な造営工事を行い、自らは滝山東照宮を建立した。特に大樹寺の大造営では「祖父生誕の地を望めるように」との思いから、本堂から三門、総門(現

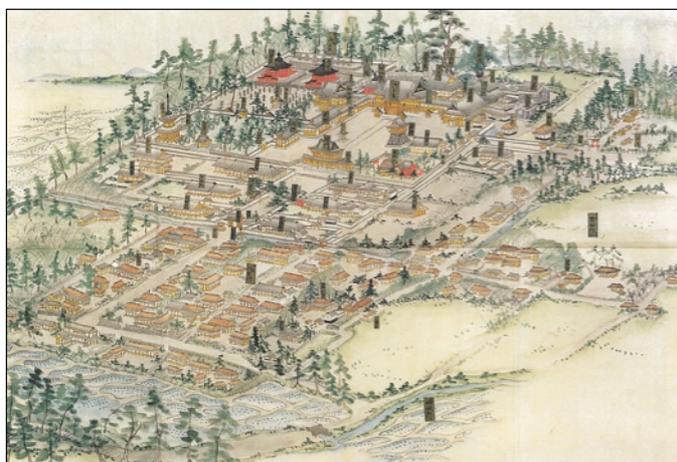


図2-1-2 大樹寺惣絵図(寛永期)

在は大樹寺小学校の南門)を通して、生誕城である岡崎城を望むことができるよう伽藍を配置、造営した。これら一連の造営は「寛永の大造営」といわれ、生誕地である本市において神君家康公の偉業を称える顕彰活動の始まりとなり、現在まで続く良好な市街地の象徴となっている。

幕府により造営されたこれら寛永期(1630年頃)の建築は、三河における地方の普請ながら、木原義久(大樹寺・滝山東照宮)、鈴木長次(伊賀八幡宮・六所神社)、平内正信(大樹寺)など、当代一流の幕府お抱えの御用大工棟梁の手によるもので、江戸建築界の潮流を見事に開花させたといえる。現在見られる伊賀八幡宮や六所神社の華麗な建築物が完成し、大樹寺が徳川将軍家の菩提寺として威容を整えるのもこの時期である。また現存する指定文化財の建造物に17世紀前半のものが多いのはこのためである。

(3)建造物

①岡崎城(岡崎城公園)

岡崎城は、神君家康公の生誕城として江戸時代を通じて神聖視され、本多家(前本多)、水野家、松平家、本多家(後本多)と家格の高い譜代大名が城主となった。5万石の石高に比して大規模な城郭を誇り、大名は岡崎城主となることを誇りにしたといわれている。しかし明治維新後の廃藩置県により、明治4年(1871)岡崎城内に額田県庁が置かれることとなり、以後、裁判



図2-1-3 岡崎城天守(景観重要建造物)

所を始めとした公的機関が旧郭内に設置されていった。明治6年(1873)に廃城令が出される

と、同年から7年(1874)にかけて岡崎城は取り壊しが行われ、建物は払い下げられた。そして旧城内の地は、家康公誕生地にちなみ「康生町」と名付けられた。その後、岡崎城の荒廃を憂いた多門伝十郎^{おかどでんじゅうろう}を始めとする旧藩士たちによって保存運動が起き、日本丸と二の丸の一部の区域を城址公園として保存したいと県へ申請を行い、明治8年(1875)県の許可を受けて公園として外観を整えることとなった。

岡崎城公園内には篤志家らによって建立された家康公の偉業を称えるいくつもの顕彰碑がある。天守前に建つ「東照公遺訓碑」^{とうしょうこういくんひ}は、刻銘によると、昭和11年(1936)4月に建立され、総高4.5メートル、碑は2.7メートルの堂々たるものである。天守の西には、家康公の産湯に使ったとされる「産湯の井戸」^{うぶゆのいど}と、家康公の胞衣を埋めたとされる「えな塚」があり、それぞれの刻銘によると、「東照公産湯井碑」^{とうしょうこうぶゆいひ}は昭和8年(1933)、「東照公えな塚石宝塔」^{とうしょうこうつかせきほうとう}は昭和11年(1936)に、共に岡崎の石工らによって花崗岩で造られたものである。



図2-1-4 東照公産湯井と産湯井碑(令和7年(2025)10月)



図2-1-5 東照公えな塚石宝塔(令和7年(2025)10月)

昭和30年(1955)になると、家康公の生誕城にも関わらず石垣しか残されていない寂しい様子を嘆いた市民が、岡崎城天守の再建を強く願い、本格的な再建運動が始まった。「お城再建は市民の力で」という機運のもと「岡崎城復元募金委員会」が結成され、総工費5,700万円のうち約1,200万円が市民からの寄付により集められた。このことから、市民の岡崎城再建にかける特別の思いを感じ取ることができる。そして、市民からの強い要望、厚い寄付を受け、昭和34年(1959)、明治期の写真を基に、鉄筋コンクリート造の天守が再建された。連日、再建工事の進捗が報じられ、「愛知新聞(昭和34年(1959)3月25日)」では、復元工事の完成が報じられるなど、関心の高さがうかがえる。

こうして家康公顕彰のシンボルとなった天守は、岡崎のランドマークとして、平成13年(2001)には入場者1,000万人に達し、復興66年を経た現在(令和7年(2025))は1,350万人以上が家康公生誕城を訪れ、この地を舞台に繰り広げられた往時の歴史に思いを馳せている。



図2-1-6 岡崎城再建(昭和34年(1959)2月18日)

②大樹寺

文明7年(1475)、松平4代親忠^{ちかただ}によって創建され、以後安城松平家の菩提寺^{ぼだいじ}となった。多宝塔(重要文化財)は、天文4年(1535)に松平7代清康によって建立されたものである。下層は方三間、総円柱、二手先斗^{ふたてさきときょう}、椽尾垂木付^{おだるきづき}とし、上層は亀腹^{かめばら}上に円形の塔身を立て、四手先斗^{よてさきときょう}椽で軒を支えている。屋根は檜皮葺^{ひわだぶき}で、鉄製の相輪を上げている。浄土宗鎮西派に属する寺院で、桶狭間の戦い^{おけはざま}から逃れた家康公が、自害を思い止まり再起の決意を固めた立志開運の寺院として知られる。登誉上人^{とうよ}²により教えを受けた「厭離穢土欣求浄土^{おんりえどごんぐじょうど}³」は、生涯家康公の旗印となった。大樹は唐名で「將軍」という意味を持つ。

元和2年(1616)に家康公が亡くなると「東照大権現^{とうしょうだいこんげん}」として神格化され、「位牌は三河大樹寺に祀るべきこと」という遺命に従い、大樹寺に祀られることとなった。このことから家康公にとって大樹寺は単に先祖代々の菩提寺というだけでなく、自身の人生観の確立と一代の危地を救った寺院として生涯に亘り特別な場所であったことがうかがえる。

また、大樹寺位牌堂^{いはいどう}には、全国で唯一、徳川家先祖である松平8代の位牌と、すべて等身大の歴代将軍14代までの位牌も安置されている。その他、家康公33回忌にあわせて3代将軍家光により造られた家康公木像も安置されている。

3代将軍家光が寛永15年(1638)から4年をかけて大小40余棟の諸堂を建立し、以後ほぼ50年ごとに幕府によって修復がなされてきた。家光は、正保元年(1644)に当寺に東照宮を造営するよう命じたが、城下に近すぎるなどの理由で東照宮は滝山寺に設けられ、当寺には家康公と秀忠の御霊屋^{みたまや}が置かれることになった。安政2年(1855)の火災により、多宝塔、総門、三門、鐘楼等を残して焼失したが、同4年(1857)に規模を縮小して本堂(市指定有形文化財)及び冷泉為恭の障壁画(重要文化財)で装飾された大方



図2-1-7 多宝塔(重要文化財)



図2-1-8 三門(県指定有形文化財)



図2-1-9 松平8代・徳川歴代将軍位牌



図2-1-10 鐘楼(県指定有形文化財)

¹ 永禄3年(1560)の織田軍と今川軍の合戦。家康公は今川方として参戦。

² 大樹寺第13世住持で、家康公の自害を思い留まらせたとされる。

³ 戦国の世は、誰もが自己の欲望のために戦いをしているから、国土が穢れきっている。その穢土を厭い離れ、永遠に平和な浄土を願う求めるならば、必ず仏の加護を得て事を成すとの意味。

丈(県指定有形文化財)等の伽藍を再建し、現在に至っている。三門(県指定有形文化財)は、三間一戸重層門。屋根は入母屋造、本瓦葺で、両脇に山廊をつけて全体を禅宗様でまとめたものである。鐘楼は、桁行3間、梁間2間、2階袴腰付。屋根は入母屋造、本瓦葺で、全体を和様でまとめている。大樹寺本堂は、桁行7間(約12.6メートル)、梁間7間(約12.6メートル)、入母屋造、本瓦葺の建造物である。

③伊賀八幡宮

正保4年(1647)の縁起では、文明2年(1470)に松平4代親忠が伊賀国(現在の三重県伊賀市や名張市辺り)から当地へ勧請したとされ、武運長久・子孫繁栄の守護神「氏神」として松平家の崇敬を受けた。祭神は、応神天皇、神功皇后、仲哀天皇で、相殿に家康公を祀っている。

永禄9年(1566)家康公は社殿を造営して、神殿の戸帳に姓名を自署し、献納している。慶長7年(1602)には朱印状を寄進し、後陽成天皇宸筆の神号額を献納、同16年(1611)に本殿など社殿の造営を行った。寛永13年(1636)には3代将軍家光が岡崎城主本多忠利を奉行とし、幕府お抱えの御用大工棟梁の鈴木長次をつかわして、大々的に造営したのが現在の社殿(本殿・幣殿・拝殿・透塀・御供所・隨身門・神橋及び石鳥居は重要文化財)である。その際、本殿は家康公建立のものを使用し、これに幣殿・拝殿を連結し、華麗な彩色を施し、権現造社殿とした。以後も幕府の手で補修が行われ、本殿は三間社流造、屋根は檜皮葺で千木、鯉木を上げ、社殿の彩色は六所神社社殿に準ずる。本殿以外は寛永13年(1636)に造られたものである。

なお、伊賀八幡宮には、戦にまつわる逸話が残っている。松平7代清康が守山崩れ⁴に遭って急死すると、尾張の織田信秀が岡崎を攻め、松平8代広忠はわずかの兵で苦戦するなか、伊賀八幡宮の方角から白羽の神矢が乱れ飛び、敵兵は敗走し、危機を脱したという。九死に一生を得た広忠は、自らその神矢を拾って伊賀八幡宮に奉納したとされている。また、伊賀八幡宮は、松平家代々の祈願所であったことから、家康公の崇敬も非常に厚く、初陣の参詣を吉例に大きな合戦の前には必ず戦勝祈願することが慣わしとなった。



図2-1-11 隨身門(重要文化財)

⁴ 三河を統一し尾張へと攻め上っていた清康が、父が謀反の罪で殺されたと誤解した阿部弥七郎に殺され、今まで築き上げた領国が瞬時に崩れてしまったできごと。

④ 龍城神社

龍城神社は岡崎城公園内にあり、岡崎城旧本丸に位置している。祭神は徳川家康公、本多忠勝朝臣、天神地祇、護国英霊である。社伝によると三河国守護代の系譜をひく西郷弾正左衛門頼嗣(稠頼)が、享徳元年(1452)～康正元年(1455)龍頭山に城を築いた際に龍神が現れ、城の井戸から水を噴出させて天に去ったとされる。以後、松平7代清康が現在の地に城を移してか

からも龍神を祀り、城の名を「龍ヶ城」、井戸の名を「龍の井」と称したといわれている。家康公生誕の際にもこの井戸から金の龍が岡崎城の上空を舞ったと伝えられており、神社の名の由来や、岡崎城が別名「龍ヶ城」といわれるのは、このように龍に関係が深いためとされている。本市の市章も龍の爪が宝珠を掴んでいる形となっている。

家康公薨去の後、藩主本多忠利はその偉業を称え、寛永年間(1624～43)に生誕城である城内に東照宮⁵を奉祀し、これが当社の創始となる。明和7年(1770)には藩主本多忠肅が、本丸内にあった東照宮を自由参拝できるようにと三の丸に移し、徳川四天王の一人である本多忠勝を祀る映世神社を新たに本丸に建てた。そして明治維新後、東照宮と映世神社を合祀して、明治9年(1876)龍城神社と改称し、現在地(旧本丸跡)

に移転した。同14年(1881)神殿・玉垣・神門・鳥居等を建設し、大正2年(1913)本殿・幣殿・拝殿・神饌所、社務所等を新築、同3年(1914)県社に昇格し、当地域の崇敬を集めることとなった。昭和23年(1948)には社殿を焼失してしまうが、同38年(1963)には広く崇敬者の浄財を得て、日光東照宮より神木の寄進を受けた社殿が竣工し、現在に至る。関連する資料として、同37年(1962)の「龍城神社社殿御造営 御寄附芳名録」が残されている。社殿は、入母屋造、銅板葺、平入、唐破風を設けた鉄筋コンクリート造である。平成8年(1996)には岡崎市市制80周年を記念して、拝殿天井に国内最大級といわれる白木彫りの昇龍が奉納された。その他、大林寺や隨念寺、甲山寺、誓願寺、善立寺など、本市には松平氏・徳川家ゆかりの寺社が城下町を中心に数多く存在しており、その周辺は門前町として栄えてきた。また、これらの寺社は紫衣勅許を受け、江戸時代を通じて修理が幕府直轄で行われるなど、徳川将軍家の手厚い庇護を受けて発展してきた。そしてこれら寺社が立ち並ぶ市街地では、家康公の



図2-1-12 龍城神社



図2-1-13 龍の井

⁵ 東照大権現たる徳川家康公を祀る神社のこと。

遺徳を偲ぶ顕彰活動が現在も至るところで続けられている。

(4)活動

①家康公行列⁶

本市の顕彰活動の代表的なものとして、毎年4月上旬の桜まつりの期間中に「家康公行列」が行われている。この行列は、もとは江戸時代に後本多⁷家藩祖本多忠勝を祀る映世神社(現在の龍城神社)の例祭(10月8日)として、岡崎藩主の指揮のもと、鎧兜^{よろいかぶと}を付け、旗指物^{はたさしもの}を立ててほら貝を鳴らし、隊列を組み、矢を放ち、鉄砲を撃つなど戦法を鍛錬した行軍儀式が起源とされる。明治9年(1876)に映世神社と徳川家康公を祀る東照宮が合併して龍城神社となると、家康公の命日である4月17日が例祭となった。こうした起源から、現在の行列では各武将の隊列の前に龍城神社の神輿行列が先陣を務める慣わしとなっている。

明治維新を迎え、岡崎藩が解体された後も、家康公生誕地としての誇りを胸に、旧藩士たちは「不忘義団^{ふぼうぎだん}」という団体を組織し、太平洋戦争(昭和16年(1941))頃まで、神輿渡御^{とぎよ}の際に甲冑などを帯^{くぶ}して供奉する武者行列として行っていた。龍城神社の狛犬の台座には、「旧岡崎藩士一同」と「大正二年九月」の文字が刻まれており、家康公への深い崇敬の念が垣間見える。昭和23年(1948)の龍城神社の火事により、甲冑などが焼失したため戦後一時休止したが、昭和28年(1953)に山岡荘八の小説「徳川家康」が出版されて家康公顕彰の気運が高まると、岡崎商店街連盟の働きかけと岡崎商工会議所の支援によって「家康まつり」として再開された。昭和34年(1959)に岡崎城天守が再建されると、まつりは市・市観光協会の主催で開催されるよ



図2-1-14 武者行列(家康公行列の前身)(大正4年)



図2-1-15 龍城神社の神輿渡御



図2-1-16 狛犬(旧岡崎藩士一同より寄贈)
(令和7年(2025)10月)

⁶ 令和6年(2024)に家康公顕彰条例が制定されたことを受け、市制施行110周年の節目となる令和8年(2026)から「家康公行列」に名称を改めた。

⁷ 岡崎城主として近世前期に本多広孝を祖とする本多家が入城していることから、近世後期の本多忠勝を祖とする城主家を後本多(平八郎)家と呼んでいる。

うになり、岡崎桜まつりの中心行事として受け継がれている。コロナ禍により、令和2、3年(2020、2021)は開催中止、同4、5年(2022、2023)は秋開催となったが、現在は毎年4月上旬の日曜日に開催し、令和7年(2025)で66回目を数えた。令和5年(2023)の家康公行列では、大河ドラマ「どうする家康」出演者を招聘した特別版として開催し、沿道や河川敷には抽選で当選した約1万人の観客が集まり、大きな盛り上がりを見せた。



図2-1-17 家康行列(平成23年(2011)4月10日)



図2-1-18 令和7年(2025)徳川家康公役
細田佳央太氏
(令和7年(2025)4月6日)

郷土の英傑・徳川家康公の遺徳を偲び、華麗な時代絵巻を繰り広げるこの家康公行列は、令和6年(2024)まで、長年、伊賀八幡宮で出陣式を行っていたが、令和7年(2025)は、大樹寺にて行われた。大樹寺は、桶狭間の戦いにより敗走した家康公をかくま匿い、家康公が自害しようとした際に、登誉上人が「厭離穢土欣求浄土」の言葉とともにいさ諫め、自害を思いとどまらせたとい



図2-1-19 大樹寺での出陣式(令和7年(2025)4月6日)

れる。その後、登誉上人は寺内の僧兵と共に家康公に加勢することとし、「厭離穢土欣求浄土」の旗印を掲げて戦ったことで、家康公は無事に岡崎城に入ることができたとされる。以降、戦場で家康公はこの8文字が書かれた旗印を掲げ、天下を取ることができた。大樹寺は徳川将軍家の菩提寺であるとともに、家康公再起の地としても重要な場所といえる。

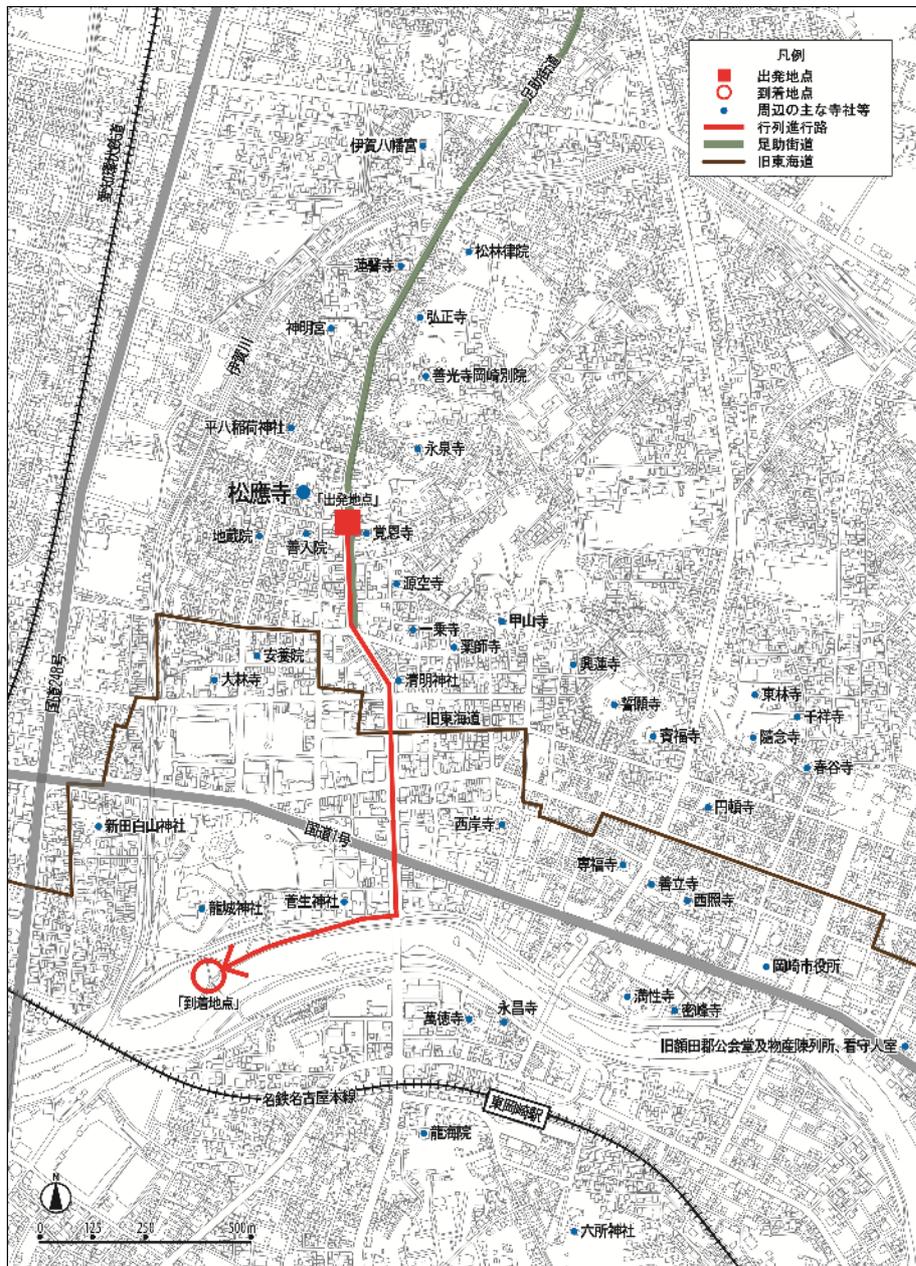
大樹寺での出陣式後、行列は松應寺東側の足助街道(県道39号線)を出発し、南下して中心市街地(旧岡崎城下町)を通り、国道1号を横断して、乙川河川緑地右岸河川敷までの約1.5キロメートルを練り歩く。家康公を中心に、家康公を支えた勇猛な三河武士団の行列や、きらびやかな姫列、少年武者や少女隊を含めて総勢700余名になる。



図2-1-20 行列道中での演舞(令和7年(2025)4月6日)

これら出陣式や市街地での行列、そして乙川河川緑地右岸河川敷でのイベントなどを見物しようと、毎年多くの市民や観光客が訪れ、岡崎の春の風物詩となっている。

行列が行進する市街地周辺には、家康公ゆかりの寺社等歴史的な建造物が多く建ち並び、旧城下町、門前町のまちなみを背景に絢爛豪華な時代絵巻が繰り広げられ、往時の風情が感じられる一幕となっている。



- 1 神輿渡御(龍城神社)
- 2 大のぼり
- 3 奴列
- 4 竹千代・少年武者列
- 5 於大の方列
- 6 築山御前・亀姫列
- 7 千姫列
- 8 少女隊
- 9 鳴物隊
- 10 岡崎三郎信康列
- 11 井伊直政列
- 12 本多忠勝列
- 13 徳川家康公列
- 14 榊原康政列
- 15 酒井忠次列

図2-1-22 隊列順(例)

図2-1-21 家康公行列進行路(令和7年(2025)4月6日)

②岡崎城再建と大樹寺から岡崎城を望む歴史的眺望

大樹寺と岡崎城天守の間には、家康公への顕彰を空間的に体現する全国的にも珍しい歴史的眺望が残っている。祖父を慕う3代将軍家光が、寛永の大造営で大樹寺の伽藍を配置、造営する際、君主生誕の地を望めるようにとの思いから誕生した、大樹寺本堂から三門、総門を通して、岡崎城天守を望む眺望である。

この大樹寺から岡崎城までの約3キロメートルの間には、歴史に裏付けされた見えない直線が引かれ、歴代岡崎城主は、毎日天守から大樹寺に向かって拝礼したとも伝えられており、大樹寺の三門から本堂までの参道には、水野忠善^{ただよし}以降の歴代城主が奉納した石灯籠がこの歴史的眺望に沿うように並んでいる。

明治維新後、岡崎城が取り壊されたときは、この総門越しに見る岡崎城天守への眺望も存在しなくなってしまったが、昭和34年(1959)の岡崎城天守の再建とともに、この江戸寛永期から続く歴史的眺望も再び本来の姿を取り戻し、平成24年(2012)に建築規制が措置されるまで、法や条例による保全の規制がないなかで、市民の郷土への愛情と誇りによってその眺望が保全されてきた。

大樹寺の総門を額縁に見立て、岡崎城天守を望む眺望景観は、まるで額の中の絵のようだといわれ、その馴染みやすさと愛情から「ビスタライン⁸」という名が広く市民に浸透し、この歴史的眺望景観を守ることが古くから慣習化してきた。大樹寺の寺領に起源を持つ大樹寺小学校では、昭和34年(1959)12月23日に制定された校歌の中で「南の門の まん中に 岡崎城も 絵のようだ」と歌われている。また、「中部経済新聞(平成24年(2012)2月22日)」では、40年前からビスタラインを眺めてきた市民の、眺望景観の保全を望む声が紹介されている。

先人から受け継がれてきた唯一無二の眺望景観は、過去と未来の人々をつなぐ大切な資源



図2-1-23 大樹寺から岡崎城までの市街地



図2-1-24 天守のない岡崎城跡(昭和元年(1926)頃)

⁸ 眺望線のこと。ビスタは眺望という意味。

であり、家康公の生誕の地であることを誇りに思う、岡崎ならではの顕彰の意識が感じられる。



図2-1-25 大樹寺総門より
(岡崎城再建前(昭和30年代初期))



図2-1-26 総門越しに望む岡崎城天守
(令和7年(2025)1月16日)

③寺社における伝統行事

ア. 御神忌法要、松平八代墓の清掃活動(大樹寺)

大樹寺の年中行事として、家康公の薨去以降、毎年命日の4月17日に、壇信徒や地域住民らが本堂に参列し、家康公の威徳を讃える「御神忌法要」が厳修⁹されている。特に、家康公が薨去してから300年にあたる大正4年(1915)には、4月10日から18日にわたり大法要が行われ、薨去350年にあたる昭和40年(1965)には、命日前夜の逮夜¹⁰である4月16日に大法要が行われた。薨去400年にあたる平成27年(2015)には盛大に400回忌の法要が行われるとともに、岡崎の経済界を中心に「徳川家康公霊夢像建立の会」が組織され、孫である家光の夢枕に立った祖父・家康公の姿を彫った石像を、岡崎石製品協同組合連合会が協賛金により岡崎産の花崗石で製作し設置した。

寺の北西の桜の木立に囲まれた静寂な場所には松平8代の墓所がある。これは松平4代親忠が大樹寺を創建する際、先祖3代の墓をこの地に移設し、家康公が父である松平8代広忠までの墓を建て再整備したものである。その後、家康公一周忌にあたり2代将軍秀忠が修復再建し、昭和44年(1969)には、大樹寺保存会により家康公の遺徳を顕彰し、遺品を納めた墓と碑が建立された。この松平8代の墓は、家康公が自害を思い留まり、再起を決意した神聖な場所として、戦前から現在まで近隣の檀家らによって季節ごとに清掃活動が行われ、大切に守り続けられている。

家康公ゆかりの寺で行われる法要や日々の清掃活動から、歴史の重みと家康公を大切に思い続ける地域住民らの心情が感じられる。



図2-1-27 御神忌法要(令和7年(2025)4月17日)



図2-1-28 薨去300年の大法要(大正4年(1915))



図2-1-29 松平八代墓の清掃活動

⁹ 仏教で儀式を厳かに執り行うこと。

¹⁰ 命日や七日ごとにある忌み日の前日の夜を指す言葉で、亡くなった日の前夜という意味。

1,200人以上の来賓を迎え盛大に式典が行われた。関連資料として、家康忠勝両公三百年祭岡崎協賛會による『岡崎(大正4年(1915)4月15日)』がある。薨去350年にあたる昭和40年(1965)には、約600人の参列のもと記念式典が行われ、祝砲花火が打ち上げられるなかをくわう宮司祝詞奏上や浦安の舞¹¹、人長の舞¹²などによって郷土の英雄家康公の遺徳を偲んだ。そして薨去400年にあたる平成27年(2015)には、生誕日に提灯行列が執り行われた。この行列は、薨去300年の際に行われた伝統行事で、泰平の世を願い、旧城下町を約6,000人の市民が龍城神社に向けて練り歩いた。

また、「中日新聞(平成30年(2018)12月31日)」の記事によれば、昭和39年(1964)より家康公ゆかりのうさぎじる兎汁が毎年元旦に振る舞われている。これは家康公の先祖である松平初代・親氏が諸国を旅していた苦難の時代に、信州松本の獵師の家で迎春の膳に兎の雑煮をいただいたという伝説にちなみ、江戸城で続いていた元旦祝賀の伝統行事である。龍城神社ではその想いを受け継ぎ、昭和38年(1963)の社殿造営にあたって日光東照宮から寄進されたごしんぼく御神木到着の奉告祭になおり兎汁の直会¹³をした。その翌年の正月からは参拝者に地元名物八丁味噌で煮込んだ兎汁を盛大に振る舞い、往時の伝統行事とともに御神霊の意に沿って家康公の遺徳を偲んでいる。

龍城神社で行われている例祭、こうたんさい降誕祭、神幸祭、提灯行列、兎汁の振る舞いには、多くの岡崎市民等が参列する様子がみられ、ときには静寂の中で、ときには太鼓や笛の音とともに、またときには冷え切った空気の中に上る湯気と味噌の香りに包まれながら、家康公やその祖先の偉業や功績、偉大さを偲ぶ気風が感じられる。



図2-1-33 提灯行列(平成27年(2015)12月26日)



図2-1-34 元旦の兎汁

¹¹ 巫女神楽の一つ。近代に作られた神楽である。

¹² 神楽人の長が、武官の装束を着け、手に神鏡の象徴という木製の輪を付けた榊の枝を持った舞。

¹³ 神社における神事の最後に、神事に参加したものと一同で神酒を戴き神饌を食する行事。

(5)おわりに

このように家康公生誕の地である本市では、松平氏・徳川家ゆかりの寺社を始めとする歴史的建造物やその周辺市街地において、家康公の遺徳を偲ぶ顕彰活動や伝統行事が古くから継承され行われている。「厭離穢土欣求浄土」を旗印に幾多の^{かんなん}艱難辛苦を乗り越え、世界でも類を見ない265年の長きに亘る天下泰平の世の礎を築いた家康公に想いを馳せ、その郷土の英傑を輩出した生誕地として市民の大きな誇りとなっていることはいうまでもない。その偉業を称える顕彰の意識は現在も市民の心の内に脈々と受け継がれ、ゆかりの寺社の荘厳な佇まいは周囲の市街地と一体となり「家康公のふるさと岡崎」の風格へとつながっている。そして顕彰活動や伝統行事、顕彰碑といったそれぞれの営みを通じて、郷土への愛情とともに家康公の生誕地に相応しい岡崎の良好な歴史的風致を形成している。

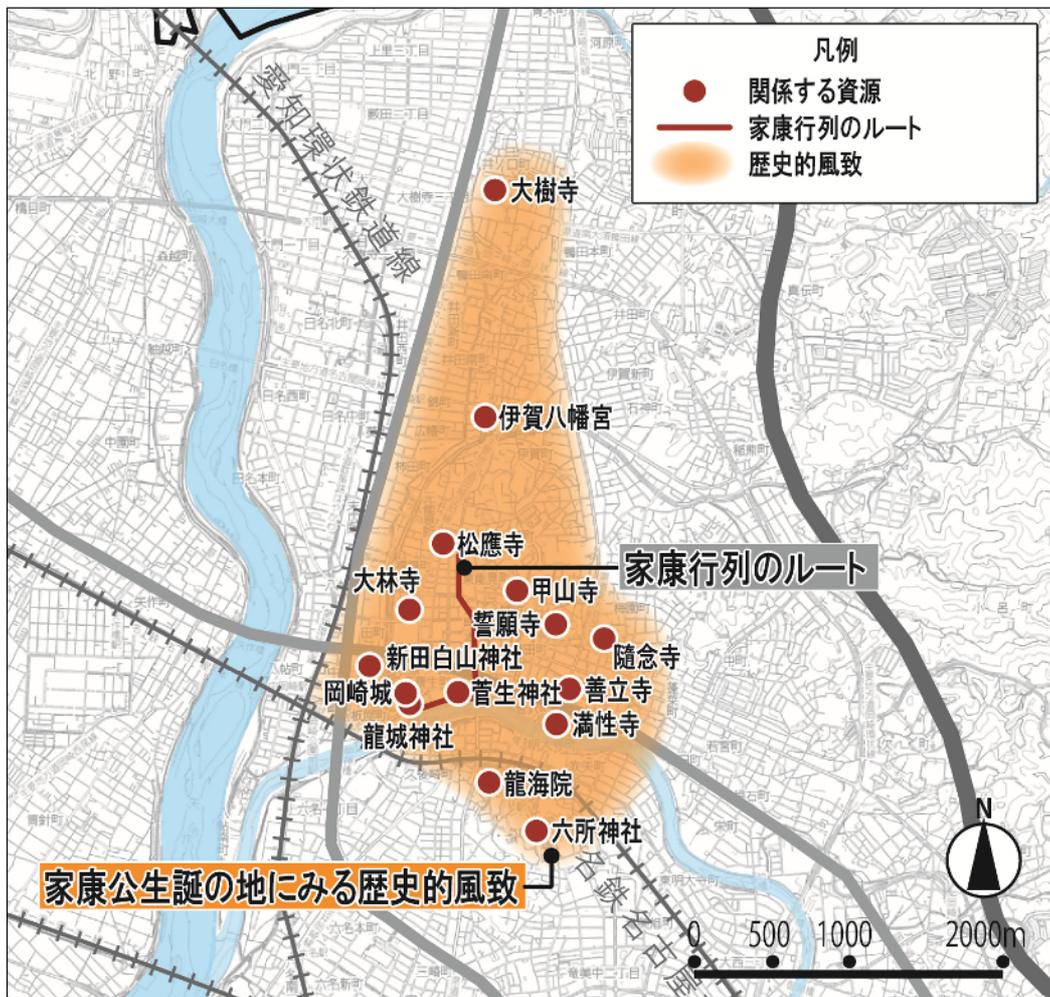


図2-1-35 家康公生誕の地にみる歴史的風致の範囲



大樹寺地区の景観配慮と教育活動

大樹寺小学校は、大樹寺から岡崎城天守を望む歴史的眺望(ピスタライン)の真下に位置しているため、古くからその眺望を保全するための配慮をしてきた。

昭和17年(1942)にはすでに校舎間を結ぶ廊下を地下道にしており、当時から意識の高さがうかがえる。平成17年(2005)に屋内運動場を新築する際にも、校舎との渡り廊下を地下道とするなど、歴史的眺望の景観に配慮した学校施設配置としている。また屋内運動場自体もこの眺望への配慮から半地下式とし、屋根の高さは三門の棟高より約6.5メートル低い9.8メートルで、更に外観のデザインも周辺の景観と整合させている。

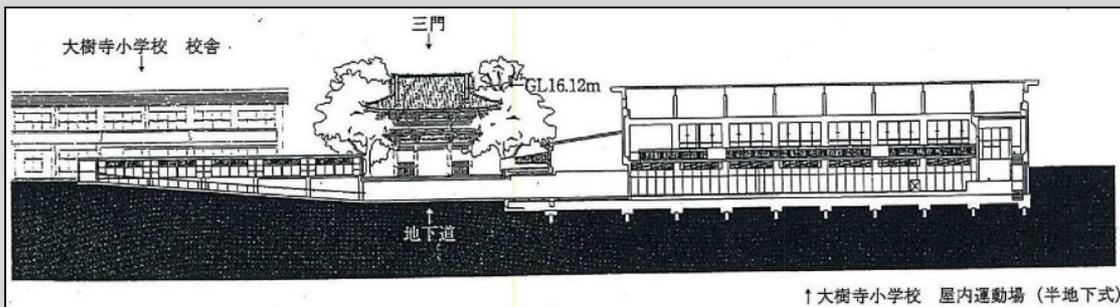


図2-1-36 大樹寺小学校の地下道(総門より北を望む)

さらに、その歴史的・文化的環境を活かし、「家康学習」と名付けた地域学習が行われ、家康公を偲ぶ先人たちの郷土への思いを後世に受け継いでいる。この学習は開校110周年の昭和58年(1983)を機に本格的に始まった。ふるさと探検で松平氏・徳川家ゆかりの地を訪ねて自分の足で聞き取り調査をしたり、そこでつかんだ事柄から更に調べを進めたり考えたりして積み上げた学びを、地域の方や大樹寺の観光客に向けたボランティアガイドなどで発信している。また、運動会の演目も家康公顕彰にちなんだものとなっており、野外劇をつくりあげて地域の方にも広く披露している。さらに、家康公が岡崎城に永禄3年(1560)5月23日に入城したことになみ、毎月23日を「自立の日」と定め、児童らの自発的な提案により「自立の活動」が行われている。そして、この場所が家康公立志の地であるという歴史的背景から、卒業式の日には卒業生がこの日のみ開放される大樹寺総門から旅立っている。

このように大樹寺地区では、古くから慣習的に景観配慮の意識が地域に根付くとともに、小学校の児童を始め地域の方まで老若男女問わず学区全体で家康公を顕彰する風土が広がっている。



図2-1-37 家康学習
(ボランティアガイド)



図2-1-38 運動会
(家康公の野外劇)



図2-1-39 自立の活動
(大樹寺の清掃活動)